

# 旭川医大 病院ニュース



編集 旭川医科大学病院  
広報誌編集委員会委員長  
廣川博之

<http://www.asahikawa-med.ac.jp/>



教授就任のご挨拶

## 病態代謝内科学のめざすもの

旭川医科大学内科学講座 病態代謝内科学分野 教授 太田 嗣人

(平成9年金沢大学医学部卒業)

平成29年9月1日付けで、病態代謝内科学分野（第二内科）教授を拝命致しました。私は、平成9年に金沢大学医学部を卒業し、同第一内科に入局後、糖尿病・内分泌を専門として参りました。金沢に生まれ育った私は、3年間の米国留学を除き、内科医として17年、金沢大学病院と北陸の関連病院で研鑽を積んで参りました。

出身教室の金沢大学第一内科は、4つの診療科からなる大内科講座で、全身を診ること、その上で専門性を持つことの2つの基本を徹底し教えられてきました。この内科学の原点に立ち、第二内科では、糖尿病、内分泌、膠原病、肝胆膵の診療科から成る教室の伝統を守り、各専門科や他の講座とのバランスと連携を重んじた診療、研究、人材育成を基本と致します。

着任後6ヶ月が経ち、道北はもとより全道の病院の院長、理事長とお会いする機会が続き、内科医の派遣依頼を数多く受けました。「地域医療は冬の時代」、「崖っぷち地域病院」といわれ久しいですが、人口350

万人に対し4つの医学部がある北陸3県と比べても、550万人を旭医、北大、札医の3大学が支える広大な北海道の医療の抱える課題をひしひしと感じております。特に、増加の著しい糖尿病は、その予防、合併症抑止、健常人と同等の寿命確保という明確な目標があり、地域社会と医療が一体となり取り組むべき課題が多く残されています。私は、旭川医大が中心となり、北海道の糖尿病・内分泌の医療をリードしていく所存です。

旭川医大は、近年、卒業生の多くが初期研修医として残る、魅力あふれる医科大学です。新専門医制度や臨床実習新制度を目前に控えた今、この強みを活かし、旭川「愛」にあふれる研修医を、最新の知識と技術を学び、日常臨床の疑問から新しい研究シーズを見つけ、グローバルな視点に立ったClinician Scientistとして、また、トータルに患者を診る「良医」として育成し、地域に根付いた、患者に優しい診療科を目指して参ります。何卒、宜しくお願い申し上げます。



教授就任のご挨拶

## 歯科口腔外科教授就任にあたって

歯科口腔外科 教授 竹川 政範

本年1月11日付けで歯科口腔外科学講座教授を拝命いたしました。私は、昭和59年に大学卒業後、旭川医科大学病院歯科口腔外科に入局し、北教授、松田教授のご指導の下、旭川医科大学で臨床、研究、教育に携わってまいりました。歯科口腔外科では顎変形症、顎骨腫瘍、埋伏歯、口唇口蓋裂など口腔外科診療および基礎疾患を有する患者様の歯科診療を中心に行っておりますが、最近では口腔ケア、インプラント治療による口腔機能の回復など歯科口腔外科の診療範囲も広がっています。

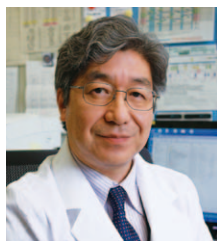
インプラント治療に関しては、口腔疾患の手術後に生じる顎の欠損に対して咀嚼機能を改善する治療を行っています。当院は北海道では数少ないインプラントを使用した広範囲欠損補綴治療の施設認定を受けておりますので、今後は顎骨腫瘍に止まらず、口唇口蓋裂や外傷等による口腔機能低下した患者様の口腔機能の回復に適応拡大をいたします。さらに、講座の研究テーマである骨再建・再生の研究を発展させて、顎骨

欠損修復に再生医療の臨床応用を目指したいと考えております。

がん治療の際に行う口腔ケアに関しては、術後合併症の減少、医療費の削減効果がある事が認知されてきました。そのため、手術前後、がん化学療法中の口腔ケアの需要が増大しています。歯科口腔外科といたしましては、周術期口腔ケアの充実が喫緊の課題と考えています。がん患者様を支える医療としての口腔ケアを院内で充実させ、さらに普及させるために努力いたしますので皆様ご協力の程よろしく願いいたします。

国際貢献では、麻酔科蘇生科、看護部のご協力を頂き、日本口唇口蓋裂協会が実施しているベトナム社会主義共和国ベンチェ省医療援助活動への参加を継続いたします。

歯科口腔外科は各科、各部門の皆様との協働の上で成り立っております。医療の充実と病院の発展のため微力ではございますが誠心誠意努力致しますので、皆様のご指導、ご支援を賜りますようお願い致します。



退職のご挨拶

## 定年退職にあたって

診療技術部 部長

臨床検査・輸血部 技師長 友田 豊

平成30年3月をもちまして定年退職を迎えることになりました。私は、昭和58年に旭川医科大学医学部附属病院に採用され36年間勤めさせていただきました。その間、検査部、病理部、輸血部、臨床検査・輸血部に配属され、多くの分野の検査業務を担当させていただきました。

平成22年に5代目の臨床検査技師長を拝命いたしました。就任当初は慣れない業務に戸惑う毎日でしたが、そんな時に臨床の先生方、看護部や他の医療技術者の皆さんから多くの助言をいただきました。そこで臨床検査技師が検査以外にも求められている事がいかに多いかを知ることが出来ました。これらの期待に応えていくことが中央診療部門の一員としての使命であると考え一つずつ実行に移すようにしてまいりました。

平成26年には2代目診療技術部長を拝命しました。診療技術部は5部門6職種 of 医療技術者約100名で構成されていますが、職種が違えば交流がほとんどありませんのでお互いの業務についてはよく分かっておりません。私はまず最初にお互いを知ることから始めようと、全体会議や交流会を企画しお互いの仕事について理解を深める活動に重点を置きました。今ではお互いどこで会っても挨拶が出来るような良好な関係とな

りました。現在は次の目標である診療支援の強化へ向かっています。

平成27年からは、学長・病院長の命により病院長補佐を勤めさせていただきました。この時は病院経営が危機的な状態であり医療技術職の立場として病院経営に参画させていただきました。診療技術部が臨床の先生方と協力して病院に貢献出来た事のひとつに、これまで臨床検査・輸血部と放射線部がそれぞれ実施していた超音波検査を統合し、平成29年から超音波画像診断センターを設立し業務の統合と合理化を進めることができました。設立計画時は、病院経営が大変な時期であり、人員増が出来ませんでしたので、臨床の先生方や両部の部長・技師長のご協力により臨床検査技師と診療放射線技師を両部から1名ずつ出し合い設立にこぎつけることができました。

最後に、私が職務を全うすることが出来たのは、多くの医師・看護師・医療スタッフ・事務系職員の皆様方をはじめ多くの同僚に支えていただけたからだと思っております。本紙面をお借りして、あらためて心よりお礼申し上げます。同時に、旭川医科大学病院の益々のご発展、および皆様のご活躍・ご健勝を心より祈念いたします。皆様長い間大変お世話になり、誠にありがとうございました。

## 治験実施貢献に対する病院長表彰

臨床研究支援センター長 田崎嘉一

臨床研究支援センターでは、日ごろから治験実施に貢献していただいている講座や診療科等への感謝を込めて、今年度から病院長表彰の受賞者の選出を始めました。

受賞者は、企業治験、製造販売後臨床試験、医師主導治験、製造販売後調査について、直近5年間程度の契約件数や実施症例数、治験収入の額などを総合的に判断して選出することとしています。

この5年間では、皮膚科学講座の本間准教授を責任医師とする治験の件数等がもっとも多かったことか

ら、本間先生を代表として、皮膚科を表彰することにいたしました。

本センターでは、臨床研究と治験が適切に行われるよう支援させていただき、医療の進歩に貢献したいと考えております。今後とも臨床研究支援センターの活動にご注目いただき、ご理解とご協力、また有効にご活用いただきたいと思います。

臨床研究支援センターホームページ

<http://www.asahikawa-med.ac.jp/hospital/chicken/>


表彰状授与 病院長室にて



平田病院長・本間准教授・田崎臨床研究支援センター長

地域医療連携ネットワークシステム

たいせつ安心 i 医療ネット

## i ネットの活用について

地域医療連携室(医療支援課地域連携係長) 山田耕平

地域医療連携ネットワークシステム「たいせつ安心 i 医療ネット」(以下「i ネット」という。)は、平成27年5月から院内で運用を開始し、3年が経過しようとしています。i ネットは、道北圏地域医療再生計画の道北クリスタルネットワーク構築事業として旭川市医師会が事業主体となり、情報提供医療機関である市内公的5病院とかけつけ医療機関との間を専用のインターネット回線で結び、患者のカルテ情報や画像データなどを共有するものです。かけつけ医療機関の医師がネットワーク上で当院の電子カルテを閲覧するためには患者が「ネットワーク同意書及び情報利用同意書」にサインしたうえで、地域医療連携室で情報公開操作を行う必要があります。経営企画部による事前アンケートで“包括承認”していない17診療科については主治医の許可がさらに必要となります。公開期間は同意取得後最終閲覧日から1年半です。

平成29年末時点でi ネット登録患者は34,408名、当院でも延べ2,000名以上の患者について情報公開を行っています。どの医療機関に対して公開しているかは、半年ごとに病院運営委員会や医長連絡会において地域医療連携室業務報告の中でお知らせさせていただいております。

このシステムの主なメリットは、患者情報を共有することにより、無駄な検査やアレルギー・禁忌・二重処方といった薬剤が原因となるトラブルを防止し、的確な診断、治療を行うことにあります。ただし、当院は専ら診療情報を提供する側ですので、システム導入による恩恵を実感できる機会は少ないかもしれません。i ネットはもともと旭川赤十字病院が運用していた「旭川クロスネット」の拡大版であり、市内公的5病院のi ネット登録患者のうち、実に9割以上が旭川赤十字病院において登録を行っています。よって、旭川赤十字病院に受診歴がある患者についてはi ネット

に加入している確率が高く、患者が旭川赤十字病院の他に旭川医科大学病院の受診診療科も含めた形で情報利用に同意していることを条件に、当院の医師はi ネットを使って旭川赤十字病院の電子カルテの情報を見ることができます。“見せるだけの運用から見に行く運用”も可能です。

i ネットに登録している患者は、電子カルテの患者確認画面の下に「i ネット登録患者(同意取得日)」というふうに表示されています。経営企画部に入会申込書を提出すると、病院情報システムの統合ランチャーに「安心i ネット」のボタンが表示されますので、このボタンを押すことでシステムを利用できます。

他医療機関との間において紹介や逆紹介を行う際、診療情報提供書の作成が大前提となりますが、i ネットで閲覧を許可されている医療機関の医師は、リアルタイムで患者の電子カルテの情報を取得できます。当院から旭川厚生病院の緩和ケア病棟へ入院(転院)する患者が昨年1年間で約30名程いましたが、入院(転院)が決定してから実際に入院するまで3週間から1か月程度のタイムラグが発生することから、診療情報提供書の授受がなされた後、入院直前までの患者の状態、治療の経過に関する情報をi ネットを介して得たいとの要望が旭川厚生病院から寄せられています。今後、こうした他病院やかけつけ医療機関からの要望に1つずつ応えていくことにより、お互いの信頼関係が構築され、紹介、逆紹介がより円滑なものになると期待されます。

i ネットの利用に関してご不明な点などございましたら、地域医療連携室までご連絡いただきますよう、よろしくお願いいたします。



## がん看護専門看護師になって

9階西ナーステーション 看護師 尾山朋世

私は2016年に旭川医科大学大学院を卒業し、昨年12月にがん看護専門看護師の資格を取得しました。2007年の入職時より9階西病棟に配属となり、大学院に進学した約2年間を除く約9年間、現在の病棟で勤務させていただいています。9階西病棟は、呼吸器・循環器・腎臓内科の混合病棟で、急性期から終末期まで幅広い病態の患者さんが入院されています。病棟で働く中で、急性期の患者さんを看護する傍ら、様々な身体症状や精神的な苦痛を抱える肺がん患者さんへの看護に難しさを感じることもあり、自分は患者さんに何ができていのか、もっとできることは無いのかと考えるようになりました。看護師7年目の時にがん看護専門看護師のお話をいただき、自分に務まるのかと悩みましたが、改めて勉強できる機会と考え大学院進学を決めました。大学院では、進学前に自分が悩んでいたことへの答えを見出す



機会をいただき、実習で出逢った患者さんからは生涯忘れることのできない貴重な学びや経験を得ることができました。

近年、がん医療は高度化・複雑化しており、肺がんに関する所では、従来の治療方法に加え、免疫療法という新たな治療方法が盛んに行われるようになりました。高齢のがん患者さんも多い中、治療方法の理解や選択に悩まれる患者さんも少なくないと感じています。がん看護専門看護師は、がん医療に関する専門的な知識を持ち合わせた上で、患者さんやご家族の揺れ動く気持ちに寄り添いながら、意思決定を支える役割があると考えます。

日々患者さんと関わる中で、患者さんはがんを抱えながらも前向きな気持ちを保ち、希望を持ち続ける力があると感じています。そのような患者さんの持つ力を支え、患者さんががんを抱えながらもその人らしく過ごせるような支援を大切にしていきたいです。その上では、様々な医療チームメンバーとも協働し、患者さんが安心して療養できる環境作りを目指していきたいと考えます。まだまだ未熟な私ですが、今後共よろしく願い致します。

## ベトナム社会主義共和国にて口唇口蓋裂児への医療援助に参加して

手術部ナースステーション 看護師 酒井正利

私は、特定非営利活動法人日本口唇口蓋裂協会(以下JCPFと略)が主催とする海外医療援助に参加しました。ベトナムでは戦争による枯れ葉材の影響で先天性疾患を持った患者が今もなお後を絶ちません。そのため、JCPFは25年前よりベトナムで、口唇口蓋裂などの口腔・顎顔面疾患の無償手術ならびに技術指導を実施しています。この活動はベトナムでは国家プロジェクトとなっており、日本でもJCPFの活動は高く評価されています。

今回、JCPFの活動期間は2017年12月22日から12月30日までの9日間でした。活動人員は北海道から九州の全国各地より口腔外科医師、麻酔科医師、小児科医師、看護師、歯科衛生士の総勢約50名で構成されました。

私が主に関わった活動内容は、手術後患者の回診、手術でした。まず初日は、ベンチエ省郊外に住む患者の手術後回診を実施しました。手術を受けた患者の自宅は、ベンチエ省市内から車で一時間、そこから徒歩で20分ほど密林を進み到着しました。密林の中に一軒家があり、電気は通っていますが水道等はなく、交通手段は主にバイクでした。ベトナムでは病院受診も十分にできない世帯が多くあります。私は、訪問した患者や家族の温かな笑顔、その暮らしなどに触れ、この活動の意義や素晴らしさを実感しました。

そして、JCPFの活動で主となる手術ですが、まず

口腔外科医師、麻酔科医師による外来診察です。約100名の患者が診察を受け、約半数の患者が手術となりました。手術に必要な麻酔器、ベッド、電気メス本体は現地の器材を借用しました。手術器具、針、材料は各施設で持ち込みました。JCPFの活動に参加した看護師は7名で、各手術室に2名の配置となり器械出し看護、外回り看護をそれぞれ担当します。手術室は3室あり、手術は1日約4件、計4日間、実施されました。手術は午前7時から始まり、手術時間1件平均2～3時間で1日の手術終了が午後7時でした。

今回の活動では、初めて一緒に医療を実践するスタッフでした。コミュニケーションを密に取ることで安全に、そしてスムーズに医療を行うことができました。手術終了後には、各施設の医師の方々から感謝の言葉を頂き、活動を通じて、看護師の役割を遂行できたと感じました。そしてJCPFの活動には治療だけでなく、現地医療スタッフへの技術伝達があります。私は主に器械出し看護技術の中で、迅速な器械出し看護技術や針刺し事故等が発生しないよう器械配置等を伝達しました。

今回、JCPFの活動を通じ、国際貢献に携わることで、貴重な経験をさせていただきました。そして、自分自身が看護師として成長できたと思います。今後、この経験を活かして看護実践をしていきたいと思ひます。



## 薬剤部 新薬情報 (73) 乾燥濃縮人プロトロンビン複合体 (ケイセントラ® 静注用)

ワルファリン (Wf) を中心としたビタミンK (VK) 拮抗薬は、肝臓におけるVK依存性血液凝固因子の産生を抑制して抗凝血効果及び抗血栓効果を発揮する。しかし、治療域が狭く、その薬物動態が複数の内因性及び外因性因子の影響を受けやすい。したがって、Wfによる治療において長期間安定していた事例であっても、VK依存性の血液凝固因子の欠乏により、プロトロンビン時間国際標準比 (PT-INR) の上昇を示す状態、すなわち、過剰の抗凝固状態を呈することがある。その結果、頭蓋内出血をはじめとする重篤な急性出血性有害事象を生じることが問題となっている。また、Wfを内服中の患者が出血リスクの高い外科手術や侵襲的処置を受ける際には、過剰の抗凝固状態により止血困難を引き起こすため、過度に亢進した抗凝固状態を正常化させる必要があった。

ケイセントラ® 静注用は、ヒト血漿を分画して製造したVK依存性血液凝固第Ⅱ、第Ⅶ、第Ⅸ、及び第Ⅹ因子とプロテインC、プロテインSからなる乾燥濃縮人プロトロンビン複合体である。

本剤はVK依存性の上記4因子を短時間に生理的濃

度まで補充し、出血リスクの高い過度に亢進した抗凝固状態を是正することが示されている。

本剤の適応となる患者は、血栓塞栓症のハイリスク患者であり、かつ血液凝固状態の変動が大きいと考えられるため、治療経験をもつ専門医の下で適切に使用されることが必要である。特に投与量は、体重と投与前のPT-INRにより異なるため、十分な注意が必要である。

さらに本剤は、ヒト血液由来混合血漿から製造される特定生物由来製品であり、使用の際には、製品の有効性及び安全性のための必要な事項について、患者やその家族に説明を行い、理解を得るように努めることが求められている。あわせて、製品名・ロット番号・使用日・患者氏名等の情報を記録し、20年間保存する義務があるため、当院では管理用のバーコードシールを貼付して払い出しており、オーダ入力した場合は、実施入力時にバーコード情報を読み込ませる必要がある。

(薬品情報室 大滝康一)

## 臨床検査・輸血部発 免疫生化学検査室がリニューアルオープンしました

いつも適正な検査依頼にご協力いただきありがとうございます。ごぞいます。

学長、病院長はじめ各先生がたのご理解とご支援により、2017年11月より臨床検査・輸血部 免疫生化学検査室の自動分析装置が最新の装置に更新されました。更新された装置の例としては、自動的に検体を各分析装置へ仕分け、運搬する分析前工程処理装置や、ホルモンや腫瘍マーカーなどを分析する免疫分析装置、さらに蛋白や脂質、酵素などを分析する生化学分析装置があります。

これらの特徴として、分析前工程処理装置はこれまで臨床検査技師が行っていた採血管の開栓や分析終了後の検体の収納も自動で行うため、省力化および効率化につながっています。また、免疫分析装置は従来の装置の約2倍の処理速度を持ち、結果報告までの時間が短縮されました。さらに、一日に最も多くの分析を行う生化学分析装置に関しては分析前検体が渋滞しないよう配置を工夫し、加えて不慮の装置トラブル時における分析停止を回避するバックアップシステムを構

築しました。よって生化学分析においても結果報告までの時間を短縮しています。実際に、免疫生化学検査における結果報告までの時間は更新前の2017年10月と比較し、約10分短縮されています (2017年12月集計)。このように、より高性能な分析装置への更新に加え、結果報告の遅延・停止を防ぐ体制を整えることができ、診療の負担を軽減することができると考えています。

最後に、今回の更新に伴い時間外検査項目の拡大などを検討しており、より診療に貢献できる検査室を目指しています。これからも患者様はもちろん各診療科の皆様の需要に応えられるよう臨床検査・輸血部一同励んで参りますので、ご指導・ご協力のほど何卒宜しくお願いいたします。今回の更新は、省力化・効率化等を踏まえ、迅速かつ質の高い検査を目指し、多くの方々のご尽力を得て実現したものです。

ご尽力いただきましたの方々にはこの紙面をお借りし、心から御礼申し上げます。

(臨床検査・輸血部 高橋順也)



分析前工程処理装置



免疫分析装置



生化学分析装置

# 吉田朋代 ピアノ弾き語りコンサートについて

12月9日（土）15時から、旭川で活躍するシンガーソングライター吉田朋代さんによるピアノ弾き語りコンサートが開催されました。

最初にクリスマスの定番曲である「クリスマスイブ」の弾き語りで始まり、その後、吉田さんのオリジナル曲であるき花のCMソングを含む数曲を披露していただきました。

そして、当日のサプライズゲストとして、吉田さんのご主人である救急科の岡田基先生がバイオリンを持って颯爽と登場し、葉加瀬太郎の名曲を演奏していただきました。突然の登場と、お二人の演奏で会場を大いに沸かせてくれました。

きていただいた参加者には、メッセージが書かれたクリスマスカードが配付されました。このクリスマスカードは吉田さんが知り合いに依頼して、小学生から本学の医師まで、色々な方に書いていただいた世界

に1つしかないものです。どんな内容が描かれているかは、受け取った人のお楽しみです。素敵な演奏とともに、来ていただいた方には、クリスマスの雰囲気を感じていただくことができたのではないかと思います。

とても多くの方がコンサートを聴きにきてくださり、病院ロビーは満員となりました。見ていた方の中には、感動で涙を流している場面も見受けられました。

アンコールでは、参加者全員できよしこの夜を合唱して、鳴り止まない拍手の中、大盛況のうちに閉幕しました。



## 平成29年度 患者数等統計

(経営企画課)

区分	外来患者延数	一日平均外来患者数	院外処方箋発行率	初診患者数	紹介率	入院患者延数	一日平均入院患者数	稼働率	前年度稼働率	平均在院日数(一般病床)
	人	人	%	人	%	人	人	%	%	日
10月	33,797	1,609.4	96.1	1,284	88.6	16,333	526.9	87.5	86.1	12.4
11月	31,886	1,594.3	95.7	1,213	90.9	16,085	536.2	89.1	86.1	12.5
12月	31,094	1,554.7	95.9	1,089	95.5	16,164	521.4	86.6	84.3	11.9
計	96,777	1,586.5	95.9	3,586	91.5	48,582	528.1	87.7	86.4	12.3
累計	288,184	1,557.8	95.9	11,370	89.1	143,952	523.5	87.0	87.3	12.3
同規模医科大学平均	216,738	1,202.5	91.9	11,839	82.3	143,813	523.0	86.2	84.5	13.4

## 編集後記

バスや電車などの公共交通機関に乗ると、多くの乗客がスマホを操作しているのが目に入ります。混んでいる車内では、前にいる人の画面が見るつもりは無いのですが見えてしまいます。メッセージを読み書きしていたり、ゲームをしてるようです。スマホの無い時代に本や新聞を読んでいたのが、スマホに代わっただけ、という話も耳にします。本誌も大学のホームページから閲覧可能ですので、読んでいる人がいるかもしれません。

先日、ある都市のホテルで朝食時、私に近くに座っていたアラサーと思われる女性が、一人で食事しながらスマホを操作しているのを見かけました。スマホの操作に熱心で、箸はスマホとは反対の手に持っているのですが、止まっているようでした。これって、一昔前なら新聞や本を読みながら食事していて、箸を持ったまま読みふけている姿なんですよ。 (経営企画部 廣川博之)

## 時事ニュース

- 2月8日（木）病院立入検査 (医療監視)
- 2月8日（木）精神科病院実地指導の受審
- 3月23日（金）学位記授与式